

水の文化センター「里川研究」ワーキングペーパー
2004 年度研究報告

田口英昭
田口穂澄

「里川研究」のための予備調査
～研究内容の設定へ向けて～

<2004 年度研究内容>

1. 『「里川」の構想』に対する思い、疑問点
2. 「里川研究」テーマ絞込みのための予備調査の設定
3. 予備調査項目と結果
 - 1) 現状の里川イメージについての調査
 - 「心象風景としての里川」を形作る、身近な水とかかわり方の現状把握
 - ・住宅街での水場の探索と人のかかわり方の観察(日常生活での観察)
 - ・水みず探検隊での子供の意識調査(参加子供への聞き取り)
 - 2) 未来の里川イメージについての調査
 - ①「新たな里川の形」を提案するための、日本人の水に対する価値観の確認
 - ・日欧の代表的な水の都市と生活者の価値観の比較調査(文献調査)
 - ② 未来の里川イメージを形作る一具体的手段としての身近な水の活用の実践
 - ・雨水利用の実践(自宅雨水タンクの利用)
4. 予備調査結果まとめ

<2005 年度研究テーマ設定>

2005 年度研究テーマ(案)

- ① 家庭における水環境への責任と働きかけ効果の明確化
 - ・「里水」の設定と「里水指数」による判定
- ② 地域共同体における水環境への責任と働きかけ効果の明確化
 - ・「里水」の集合体である「里川」の形の提案

1. 『「里川」の構想』に対する思い、疑問点

※別紙報告書参照 「20040318 水の文化センター「里川」研究にあたって」

水の文化センターにおいて、『「里川」の構想』が社会への提案の方向性として示されました。ここでは「里川」を「居住地に近いみんなで守る川」と定義しています。この構想を、我々は、『「里川」という象徴語のもとに「みんなを使いながら川を守る」』ことを社会に提案することと解釈しました。さらに、これを具体的な形として示し、これが有効に働くことが我々の「里川研究」の意義であり、センターの存在意義であり、我々の喜びに至るものであると考えました。その一助となりうるための研究テーマは何であるのか、ということが我々の「里川研究」の出発点となりました。

「里川」という言葉を聞いたとき、多くの人がまず、幼少期の水辺遊び、川や田んぼ、あるいは山野を思い出したに違いありません。そしてそれが今現在の自分の生活とかけ離れたものであることも感じたに違いありません。

即ち、都市に住む多くの人々が「使いながら守る川」を「里川」と認識するためには、このような「里川」イメージでは成り立たないことが直感的に分かります。「心象風景」に過ぎない「里川」という言葉のイメージに、どうやって新たな意味合いを込めてゆくことができるか、それが最初の疑問点でした。

そして次は、「みんなで守る」こととはどういうことかということでした。「水」にかかわらず、居住地への居住者のかかわりはごく限られたものになってはいませんか。ましてや自宅近辺を流れる川や水路は、広い地域を流れており、自分のものあるいは自分たちのものと思う気持ちははるかに小さく感じられます。「自分たち」という意味もよく分かりません。居住者同士つまり、「みんな」とはだれか、「みんなで守る」意義がどうして生じるのかという疑問も生じました。

また、先に「心象風景」である「里川」では本構想に対応しきれないと述べたことと逆になりますが、それがなければ先の「形」も描けないのではないかという不安も感じました。子供たちは今、どんな場でどんな「里川」の心象風景をつくりつつあるのか、その場が失われていやしないかという疑問が生じました。

一方で、水のある風景というのは、とても気持ちの良いものだということは誰もが感じるころだと思えます。国内ではウォーターフロント、親水公園、ビオトープ、新たな水辺の造成例や掛け声に枚挙ありません。裏返せば、それほど水辺が遠くなっているということでしょうし、その反動でしょうか、国外のベネツィアやアムステルダムなどの水の都への憧れと旅行者は増すばかりです。

このような欧米の自然回帰、環境修景の先端事例または伝統的事例を国内にも活かそうとの動きに際して、水を受け入れる感性や価値観からモディファイすることを提言する事例はあまり聞かれませんが、日本にあった水辺の形、付き合い方の形はどんなものなのかという疑問も生じました。

それでもなお、現在の日本の都市生活において希薄になってしまった水と人との付き合い方を復活させるヒントがこれらの「活きた水都市」には存在するのではないか、今日まで生き続けた理由が存在するのではないか、これを参考にできはしないかという期待は十分にわいてきます。

最後に、先のような自身の置かれている水環境と本構想を比較すると大きなギャップを感じます。自身の水利用に立ち返ったとき、ほとんどが上下水道に依存している自身の水環境はいったいどんなものなのか、もう一度、他の水として最も身近な水の存在である雨水の利用を通じて、別の視点から捉えなおしてみようと考えました。これが未来の里川の形を形作る一手段になりえないかという期待を持ちつつです。

2. 「里川研究」テーマ絞込みのための予備調査の設定

※別紙報告書参照 「20040409 水の文化センター「里川」研究 今後の取り組みポイントおよび調査対象」

以上の里川の構想に対する散発的な疑問と期待を出発点とし、将来、具体的な形として提示できる成果を得ることを目指した研究テーマを絞込むために、我々はこれらを整理し、次の項目を予備調査することから「里川研究」に着手しました。

- 1) 現状の里川イメージについての調査
 - 「心象風景としての里川」を形作る、身近な水とかかわり方の現状把握
 - ・住宅街での水場の探索と人のかかわり方の観察(日常生活での観察)
 - ・水みず探検隊での子供の意識調査(参加子供への聞き取り)
- 2) 未来の里川イメージについての調査
 - ①「新たな里川の形」を提案するための、日本人の水に対する価値観の確認
 - ・日欧の代表的な水の都市と生活者の価値観の比較調査(FW および文献調査)
 - ②未来の里川イメージを形作る一具体的手段としての身近な水の活用の実践
 - ・雨水利用の実践(自宅雨水タンクの利用)

3. 予備調査項目と結果

1) 現状の里川イメージについての調査

はじめに、我々は自宅付近の水辺とかかわり方を観察しました。居住地は愛知県安城市。矢作川下流域の三河平野の中部に位置します。市北部を国道一号線が横切るとともに、自動車生産の豊田市に南接し、その位置と地域産業の発展により、工場と住宅、商業施設が田畑を塗り替えてきた地域です。古くは安城ヶ原と言われ、岡崎と知立の東海道宿場間の野原であったそうです。地主の老婆に聞くと、昔から水の少ない地域で水の確保が大変だったということです。三河平野の中の微高地であると考えられます。明治用水の開通を契機に農業は発展し、古くは日本のデンマークといわれたほど農耕と牧畜の複合した形態の農業が特徴的に発展した地域です。

いわゆる川として認識できる水の流れは、市の東境へ行けば矢作川、西へ行けば尾張と三河を分ける境川がありますが、市内には大きな河川はほとんどなく、せいぜい幅 3m、水深も 10 数 cm 程度の川が散見されるのみで、川というより用水のレベルです。水量の大きい流路はむしろ、明治用水の支線あるいは春夏の水田湛水期に開放される用水栓による水田周りの側溝がみられる程度です。水質は一部の低地、商業地域を除いてはそれほど汚いと感じるレベルではなく、むしろこれまでもっていた感覚よりもきれいになったなと感じるほどでした。

これらの川、用水と人のかかわりを観察すると、川には水に触れられるような岸辺は少なく、用水の大型支線は水量が大きいのか敷設フェンス張りあるいは蓋があり、人とかかわりを遮断しています。側道の散策と開拓の歴史に触れる史跡との関わりが唯一の触れ合いと思われれます。

また末梢の用水では、水量の季節的変動が大きく、水田湛水期には流量、流速が大きく、危険な存在と感じられるほどで、それ以外の季節は水深、水量ともに微々たるものです。水量の変動によるのかもしれませんが、水生生物として、ドジョウ、ザリガニ、オタマジャクシ、数種の小魚類が認められますが、それをタモですくったり、釣りをしてはしゃぐ子供たちの姿はこの 1 年で数件しか見ることができませんでした。近所で最も大きく身近な水場は湛水期の水田です。自宅周囲には、毎年潰されて行きますがまだまだ広い水田が存在します。しかしながら、ここで遊ぶ子供たちの姿はほとんど認められませんでした。

また、最近特徴的に思うのが、数多く整備されてきた調水池です。住宅化により多く埋め立てられた水田にかわって、住宅街に大きな調水池が目立つようになりました。自宅から歩いて 100m 程度のところにある調水池を 1 例とすると、大きさは一戸建て住宅 10 件分程度と大きく(他に比べて小さい)、普段の水量は水深 20cm-1m 以下のごく浅いものですが、周囲地表面

からの深度は 4.5m 程度有り、旧来の水田の保水力を集中的に置き換えられる能力を有しているようです。池の内部には多種水生植物の植栽があり、最近では鴨などの水鳥が遊ぶようになってきました。岸辺も遊歩道のように美しく整備されています。4 年ほど前の整備途中の姿から、これは面白いものができるかと期待していましたが、完成してみると、周囲はフェンスで仕切られ、門は施錠され、立ち入りは禁止されてしまいました。岸辺に近づくことはできず、ましてや水に触れることもできません。したがって、地域住民は関わり方をもち得ない状態です。

また、小学校の校庭にビオトープが設けられるようになりました。期待して見に行くと、教育方針を慮ったかのような子供たちの声を書かれたカードなどがありましたが、それがしらけて見えるほど廃れ、どう扱ってよいものかわからない姿があらわになっておりました。付け加えて、雨降りの登下校は魅力的なものだったと記憶していますが、それを楽しむ風景、いわゆるどろんこの姿を見ることはついにありませんでした。

その他の水辺で人とのかかわりが認められたのは、公園の水のみ場、噴水、水が流れるモニュメント、散策路に設けられ魚が放流された人工水路です。ここでは比較的小児たちの水との遊びが観察できました。水を汲み、砂場で山を作る子供たち、水路の中を歩く子供たちがありました。大人たちは朝夕の散策を楽しみ、学生やサラリーマンは駅前モニュメントの池の縁に座り涼を感じる姿が目にとまりました。

以上をまとめると、個人的な体験とはかなり相違した水の間とかかわり方があることに気付かされました。即ち、水との直接的な触れ合いは人工的な水辺でかつきれいな水であることが条件になっていること、その水辺はごく少ないこと、また、自然に近い水辺とのかかわりには、直接触れない距離があること。

個人的な体験から言うと、尾張平野のど真ん中に育ち、岐阜の山奥に遊んだ経験と違って、人工的な水辺がその直接的にかかわりのほぼ全てを占めるという点が印象に残りました。また、決められたあるいは想定された範囲内のかかわり方で楽しむということが特徴的であるように感じました。遊び方、かかわり方の工夫という積極的な働きかけはついに認められませんでした。

次は、第 3 回水みず探検隊において、愛知県半田市内の河川において水生生物の採取をしたときに参加した子供たちにヒアリングした内容です。採取した魚類は大型なものから小型のものまで多種多様で、普段の遊びの範囲内ではなかなか体験できない面白いものと思いました。

しかしながら、小学校低・中学年を中心とした参加子供の感想は意外に冷めたものでした。「面白かった？」との質問に「面白かった」という一方で、「また来たい？」との質問には「汚いやだ」、「危ないからきちゃいけない」と答えるという事例がありました。単に「面白くなかった」という答えも複数認めました。これに対して、魚がいっぱいいたり、きれいになったらどうかとの問いに対して、複数の子供が「でも危ないからきちゃいけない」と締めくくったのが心に残ります。先の魅力的な調水池にフェンスを越えて入り込む子供たちの姿がこの数年間 1 件も見られないことと関係があるのかもしれませんが。

以上、現状の里川のイメージについて調査した結果をまとめると、近年の水場は人工的なものが中心を占めること、かかわり方に積極的な働きかけ(工夫)は認められず、直接触れる水の質は水道水レベルであるということです。一方で自然に近い水とのかかわり方には距離があるということです。

つまり、現代の都市地域に居住する人の「水」とは蛇口からでてくる水そのものになってしまったと考えざるをえず、「心象風景」である「里川」イメージの造成は旧来のイメージと全く異なるものであることが分かりました。

2) 未来の里川イメージについての調査

※別紙報告書参照「20040806「里川」研究 進捗報告」

① 日本人の水に対する価値観の現状把握

このような都市地域における水場とのかかわり方の現状がある一方で、水の都といわれる地域、街が存在することも事実です。国内では、特に中部地方では大垣が水の都としての認知度が高く、国外ではアムステルダムやベネツィアが挙げられます。

これらの都市はその立地条件から、単に水場が多いだけでなく、日常生活において水との密接なかかわりを持ち、かつその視点が多様であり、その結果として水の都としての特徴的な環境、機能が生じていると考えられます。

そこで、これらの都市に残る水とのかかわり方の「活きた事例」が、失われた水とのかかわり方を復活させるあるいは新たに創造するヒントになるのではないかと考えました。それら地域の水に対する思想・価値観、環境条件、歴史、条件の比較を通して、現在も活着しているその理由と、新たな水意識創造のためのヒント、これを活用する際に考慮しなければならない点を炙り出すことを試みました。

その比較対照として、濃尾輪中地域とオランダを選定しました。濃尾輪中地域は木曾三川下流地域に広がる日本最大のゼロメートル地帯にあり、古くから水害とその恩恵とともに共生してきた地域です。ここには中部地方の水の都「大垣」も位置します。これに対して、国際的な水の都の代表として、フィールドワークで訪れたことのあるオランダ(アムステルダム)を比較することとしました。オランダはライン川の下流に位置し、国土の1/4が海面下にあります。これらの地域の共通点として、河口部の低湿地であること、水害とその恩恵に共生してきたこと、またオランダ人技師デ・レーケが双方に関わってきていることが挙げられます、なるべく近い立地環境のもと、国民の価値観の相違が水とのかかわり方の相違にどのように反映するのかという視点、それがデ・レーケの目にどう映ったか、それを克服する工夫があったのか、さらに、現状の差はどのような歴史的背景と条件相違によってもたらされたのかを比較しました。

立地環境を比較するために、先ず等縮尺の地図を切り貼りし、その大きさの比較をしました。その結果、水面規模、低湿地域とされる面積は圧倒的に濃尾輪中が小さいことが分かりました。日本最大級の低湿地域といいつつも、その面積は国際的に見れば取るに足りないものでありました。また、河川流量では木曾川はライン川の1/6、河川勾配は同1/5~10、季節流量比は同3倍、と濃尾輪中地域での水の滞留時間は非常に小さく、常に多いわけではないということがわかります。

これが理由すると考えられますが、洪水に対する整備水準を比較すると、日本が1回/30-40年であることに對して、オランダの場合、1回/10000年というレベルを誇っています。オランダにおける水防の思想は以外にも堤防強化や海への押し流しという徹底的な水の排除にありました。現在の日本において問題視されている思想です。しかしながら、その整備水準にもかかわらず、予想を上回る増水のために、現在では川にみちをゆずる政策(氾濫域の設定)などの水害を受容する思想への変化に移行してきているようです。

これに對して日本では古くから共生という選択肢を選んできたと言われます(自然とうまくつまってきた)。しかしながら、上記の河川環境の違いにみて分かるように、共生(非難、水防)で対応できるレベルであったと考えることが妥当と思われました。そして、西洋思想、科学技術の発展を通して、その完全化のために、徹底的な水の排除がなされ、現在に至ったと考えられます。

これらを考えると、アラン・コルバン氏の「西洋文明圏では、根源的な水が秩序に先立つ混沌を表現する」という西欧の水に対する認識や日本の自然観などの思想・価値観による違いが水との付き合い方の違いを生じたわけではなく、逆に環境の違いが違う思想や価値観を生んだとみることができると思います。

では、現代におけるオランダの川にみちをゆずる思想と、日本の徹底的な水の排除という思想のレベルの違いはなぜ生じたのでしょうか。また、都市、地域の違いはなぜ生じたのでしょうか。

濃尾輪中地域における水の中の暮らしの歴史と現在を見るために、輪中地域のいくつかの資料館、地域、水の都大垣を探訪しました。岐阜県海津町の歴史民族資料館、三重県長島町の輪中の里をみると、古くからの水の中の暮らしの知恵の歴史がありました。堀田という水田の特徴的な利用方法はオランダのポルダー地域の土地利用と共通するものがあると感じ、水屋はその共

生のありかたの一例を示したものでした。しかしながら、堀田は復元したものがあただけで、居住地は一見、自宅近くの水田地域となんら変わらないように見え、一部残る水屋、微高地に寄せ集まる住宅以外は、一般地域の都市郊外のように、新興住宅あるいは工場、商業地域への進出が地域の立地環境の特徴を覆い隠すほどの勢いで広がっていました。

大垣は水の都というだけに、自噴水のモニュメントや豊富な水量を有する運河、河川が縦横に走っておりました。穏やかな時間の流れと潤いを感じ、癒しの水の効果を感じました。しかしながら、活きている感じはしなかったのです。生活必需品とは感じませんでした。あるといいねというのが率直な感想でした。

それに対してアムステルダムやイタリアのベネツィアにおける運河はそのものが生活の一部であり、なくては考えられないものと感じたことを覚えています。

この差は何なのか。先の考察と交えて考えると、アムステルダムやベネツィアはどれだけ水を排除しても排除しきれない立地環境に有り、現代でも水の脅威に曝されつづけている。これに対して濃尾輪中は徹底的な水の排除が効を奏するレベルの立地環境であったがゆえにその差が生じたと考えられないでしょうか。「地」と「水」が生活上等価になりうるほどの「淀む水」の存在有無がその差を作っている。「淀む水」を徹底的に排除し、潤いは水道水でまかなうことが、旧来の水場と人と水のかかわりを失わせ、水の文化が減んでいった。しかしながら、そのバランスが崩れるほどの開発によって、近年の都市型水害にみられるように日本においても徹底的な水の排除にほころびが生じるようになりました。

視点を改めて、地域共同体と水とのかかわり方を、水防を通して比較すると面白いことが分かりました。水防の政策決定に対して、オランダでは多数派形成が許されない合議制のもとでの十分な議論と情報公開が必要であるのに対し、日本では利害関係者の狭い限定によって行われるという違いが有るようです。また、水防に関わる用地の利用規制を例にすると、前者は法規制の下での破壊的な被害を受ける場所の開発禁止、後者は用地の徹底的な利用と、公共性と個人の利害関係のバランス感覚に大きな差が見られます。

オランダ人技師デ・レーケも、日本での河川改修に際し、個人的な利害や狭い視野での対応があること、広い地域を通した一貫的な対応ができないことに大きな不満を抱えていたと推察される記録が残っているようです。

輪中地域では「輪中根性」と言われる、自分がよければそれでよいという特徴的な意識のあることが報告されています。

つまり、オランダと日本では公共物へのかかわり方が大きく異なっている事がわかります。公共の利益と個人の利害の優先順位、即ち地域における共同体の関係・単位・存立形態の違いが異なっているようです。立地環境の差とともに、共同体の差も公共的性質を有する対象のあり方におおきな差を生じることが考えられました。

②未来の里川イメージを形作る一具体的手段としての身近な水の活用の実践

将来の水利用の形態を考えたとき、その一手段として雨水利用が浮かびます。その事例は東京都墨田区などにあります。では、これにならって、自身の上下水道に任せきりの水利用形態が、もっとも身近な雨の利用で簡単に変えられないだろうか、少なくとも水の消費に対する意識だけでも変えることができないだろうかと期待して、具体的に体験するという試みを行ってみました。

住居は4戸1棟2階建てアパートの1Fです。屋根の反面からの雨樋が1Fの庭に引かれ、小さな雨水ますを経て、外部へ流出するようになっていました。その雨樋から雨水全量を200Lの雨水貯留槽に引き込み、利用するという試みです。過剰量はオーバーフローします。

趣味で多種多数の植物(鉢植え)を室内外で育てていますが、その灌水に利用することからはじめました。直植えでない鉢ものの乾きは早く、夏場の灌水量はバカにならず、雨水貯留槽の設置前は毎日水道水をホースで散水していました。雨水貯留槽設置により初めて、3日でその全量

を消費するほどの量を散水していたことが分かりました。しかしながら、雨が降らないとすぐに雨水は枯渇し、もとの水道水に頼らざるを得ない状態になりました。また、雨水タンクの利用は夏の一時期のみで、それ以外の時期の用途に行き詰まることとなりました。室内植物への利用は水質が気になり(気になる程度で見かけ上はきれいなものです)、また手間がかかることからなかなか続きはしませんでした。トイレの水への利用は設備設置の難点から手が出ませんでした。そうすると夏場以外は少量の灌水と子供の水遊びとタバコの火を消す程度の用途となってしまいます。

試みた雨水利用は、いかに水道水が便利なもので、それに頼りきった生活であるということを実感させられたということと、雨水の本格的な有効利用には大きな設備投資を要すること、しかしながらそのコスト対効果がよく分からない、その代替効果がよくわからないと感じたこと、季節的な供給量と消費量の変動は以外に大きいということ気付かせてくれたことでした。また、水質に対してその用途に関わらず高水準なものを求めてしまう自分にも気付かされました。

以上、未来の里川の形を提案するための水辺都市の比較から、活きた水場とのかかわりは、現に存在する脅威(生きること、守ること)によってのみ真に失われずに保たれるということ、その維持形態は共同体の存立の仕方によって影響を受けるということです。また、都市部に住む人にとっての水とはまさに水道水そのものであり、蛇口以前と排水溝以降は何が起こっているかまったく知らないということです。

4. 予備調査結果まとめ

以上の予備調査から、「里川」研究の方向性を決める重要な要因がいくつか見えてきました。

現状の里川イメージは、実はすでに現状のものではなく、過去のイメージとなっていること。即ち、これまでの郷愁に近い「里川」イメージを基本にすると、共感すら得られない状況になってしまうことです。真の現状の「里川」イメージとは、それが外にあっても「水道水」に限りなく近い「水」であり、働きかけを必要としないあるいは余地をもたない人工的である程度完成された流れであること。それに対して自然な水場には触れないあるいは触れたくない心の距離があるということです。より端的に言えば、都市部に住む個人の水とは家庭内でも外であっても、水道水そのものであり、蛇口以前と排水溝以降は知らぬ存ぜぬ世界であり、それで良しとしてきた世界なのです。この状況のもとでの取り組み方を考えなければならないということです。

一方、未来の里川の形を提案するにあたって、その対象となる水は、それに脅威が存在しないあるいは感じない状態では、活きた形の水場にならないし、かかわり方も活かないということが分かりました。しかし、これを本構想の実現のために逆に解釈すると、こういえるのではないでしょうか。水害や生きるための水の確保という脅威はほとんど消えたが、別の脅威を顕在化することで、その脅威に対する別の活きた水場、かかわり方が生じると。

そしてこの新たな水場とかかわり方を活かすには、日本における本来の共同体の姿が家庭という単位であると再確認し、まず、家庭と水場のかかわり方をしっかりと提示する、これがあってはじめて、各家庭同士あるいは地域の川「みんなを守る里川」があると思ったのです。

<2005 年度研究テーマ設定>

2005 年度研究テーマ(案)

以上の予備調査結果から、我々は、里川研究のテーマを次のように絞り込みました。

- ① 家庭における水環境への責任と働きかけ効果の明確化

・「里水」の設定と「里水指数」による判定

② 地域共同体における水環境への責任と働きかけ効果の明確化

・「里水」の集合体である「里川」の形の提案

活きる水場、かかわり方の前提となる脅威として、消費による水環境への負荷を設定します。問題はありますが、ゴミの分別、リサイクルやアイドリングストップは脅威の存在とそれに対する個人とのつながりを分かりやすく提示した例と言えます。そのような個人と脅威のかかわりの姿を明確にするのです。

そして、共同体の最小単位である、家庭と里川の接点をより明確にするために、家庭の水を「里水」という最小単位の姿として提案します。これに対する家庭の責任範囲とレベルを明確にするために、「里水指数」を設定し、それを簡単に知り、影響の及ぶ範囲を明示するシステムを作る。

現在のイメージでは、インターネット上に判定フォームをつくり、家の形状、敷地面積や舗装面積、屋上緑化面積、水道水消費量、雨水代替量、用途別排水量などの家庭における水利用にかかわるあらゆる(今後調査)数値を入力することで、水環境負荷度を算出するものを想定しています。さらに、図式でその水がどこにどの程度影響を及ぼしているか一覧できるようにします。この「里水指数」を地域の目標値あるいは平均値と比較することで、各家庭の影響度、貢献度を明確に判定し、その影響の及ぶ範囲を明確にするのです。

さらに、この「里水」の集合体が「里川」(地中の下水道であっても、地上の河川でもよい)であると位置付け、「里水」の責任対象とする。「里川」は「里水」のそれに加えて、より公共性の高い価値、即ち防災や水環境負荷以外の様々な環境負荷を盛込み脅威の範囲をより大きなものとし、す。「里水指数」の上位の判定基準として「里川指数」が地域にあってもよいのかもしれませんが。

このシステムは、別の見方をすれば、「里川」の維持には「里水」の協力が必要であり、家庭・個人の協力を要し、地域共同体を生む力となるのです。即ち「みんなで守る里川」を形作るものとなるのです。そして、地域共同体の力は地方自治体の力となり、魅力となる。そしてさらに人が集まる街となり、個人と地域、地方自治体の利害が一致するようにもっていくのです。

利害一致のためには、地方自治体は水環境負荷度に対するペナルティーあるいは、貢献度に対する税金の減免措置などにより、この働きかけを促進することも必要かもしれません。さらに他の地域との差を同様に明確化し、地域間の競争を促すとともに、より貢献度の高い地域にはより高度な環境政策を施行することによりその進展を促進することも可能かもしれません。

集中から分散、個人の意識の向上は今後の水問題を解決する上で重要な要素であり、これを含んだ形の提案が必要であると思いました。

以上、個人の責任の明確化から端を発し、地域共同体を生み、「みんなで守る里川」を創造するシステムを具体的な形として提案することを 2005 年度の研究テーマにしたいと考えました。

以上

参考文献

- ・ 川づくりをまちづくりに 樋口昭彦ら 学芸社出版
- ・ 低地オランダ 石田壽一 丸善
- ・ 水道の文化 鯖田豊之 新潮選書
- ・ 都市はいかにつくられたか 朝日選書
- ・ 雨を活かす 辰濃和男ら 岩波アクティブ新書
- ・ 風土 和辻哲郎 岩波文庫
- ・ 川のなんでも小事典 村本嘉雄ら 講談社
- ・ ラインの文化史 鯖田豊之 刀水書房
- ・ 川とヨーロッパ 保屋野 初子 築地書房
- ・ 川 人 街 リバーフロント整備センター 山海堂

- ・ 川を知る事典 鈴木理生 日本実業出版
- ・ 濃尾における輪中の史的研究 松尾国松 大衆書房
- ・ 日本の川を甦らせた技師デ・レイケ 上林好之 草思社
- ・ 河原にできた中世の町 網野善彦 岩波書店
- ・ 輪中 伊藤安男ら 学生出版
- ・ ふるさとの宝もの輪中 赤座憲久ら じゃこめてい出版
- ・ 変容する輪中 伊藤安男 古今書院
- ・ 都市に水辺をつくる 藤原宣夫 技術書院
- ・ 都市をめぐる水の話 紀谷文樹ら 井上書院
- ・ 水を活かす循環環境都市づくり 和田安彦ら 技法堂出版
- ・ インターネット上の情報